

# 縄文中期の抽象文世界

—龍か山椒魚か蝮か—

末木 健

## はじめに

- 1. 抽象文の変遷
- 2. 初期抽象文の実態

## 3. 抽象文＝サンショウウオ状文の正体

## まとめ

## はじめに

縄文時代中期の前半に、イノシシやカエルなど様々な動物や人面・人体を現した装飾華美な土器が盛行する（第1表）。この中に「サンショウウオ文」（註1）、あるいは「ミズチ文」（註2）と呼ばれる独特的の文様が土器の胴部に付けられるものがあり、これらを藤森栄一氏は「抽象文」と呼び縄文中期の藤内I式のメルクマールとした（藤森栄一 1965）。

この抽象文は様々な解釈がされており、「みづち＝水蛇」、あるいはオオサンショウウオ、または海に棲むイルカなどの水棲動物、またはヘビなどにその起源が求められている。更に、武藤雄六氏や田中基氏、小林公明氏などによれば、中国の創世神話や殷周時代から前漢時代の青銅器文様にその起源を求める、「一本足の龍」文がその起源ではないかという解釈が生まれている（小林公明 1991）。

この文様が様々な動物や想像上の生物に想定されている理由は、その特異な形からで、土器の胴部に2体1対で付けられ、背中をへの字または逆U字に曲げ、頭には目や口を表現し、体には鱗や特殊な文様が施され、尾は細く長く伸び丸まっているものや、二股に割れているものもある。この胴体中央部からイッポンのヒレまたは足のような触手状隆線が丸く伸び、その先端は丸いものと二つに割れているものがある。胴体は古い時期は全体がほっそりしているが、次第に幅が太くなり、特に胴部が最大幅となる。

このほかに様々なバリエーションがあるが、その年代は中期前半の新道式期から藤内式期に特徴的で、中期中葉の井戸尻式期になると文様は更に抽象化され、又は消滅する。

この文様は、三上徹也氏によって集成され（三上徹也 1986）、西関東と長野県の八ヶ岳山麓～諏訪地域に分布するものとして捉えられ、2001年には三上氏の集成では空白地帯であった山梨県内資料を櫛原功一氏が集成し、19遺跡59例を示した（櫛原功一 2001）。なお、その後、関係資料も増加していることは言うまでもないが、こう

した集成により、所謂「サンショウウオ文」は東京・神奈川の西関東丘陵地域から山梨県の甲府盆地周辺・八ヶ岳山麓、長野県の八ヶ岳山麓～諏訪地域に限定して出現する文様であることが示され、2001年の秋には釧路堂遺跡博物館において『第13回特別展 抽象文土器の世界』が開催されている。この図録は、抽象文土器の編年や分類、分布を総括的に表したもので、旧来の研究や発掘成果の到達点といってもよいだろう。

本論は、これらの資料を基に、抽象文がどのような要素によって出現したのか、また、その文様の意味について改めて探り、その成立の姿を述べたいと思う。

## 1 抽象文の変遷

サンショウウオ文等と呼ばれる抽象文は、三上徹也、猪俣喜彦、櫛原功一各氏の集成によって、西関東・山梨・八ヶ岳山麓の地域に分布することが明らかにされており（第1図1-1, 1-2）、また、その年代も中期前半の新道式～藤内式の時期に出現し、サンショウウオ文そのものとしては井戸尻式までは残らないことが示されている。この年代的な変遷を3氏は次のように述べている。

まず、三上徹也氏は中期中葉の土器をI～V段階に分け、抽象文を次のように説明している。（第2図2-1）

I（新道～勝坂I）抽象文に形どられた「粘土板」をそのまま器面に貼付する。そして先端三角形の棒状工具による押引施文がなされる。また、多くの抽象文が2窓状隆帶文を伴っている。

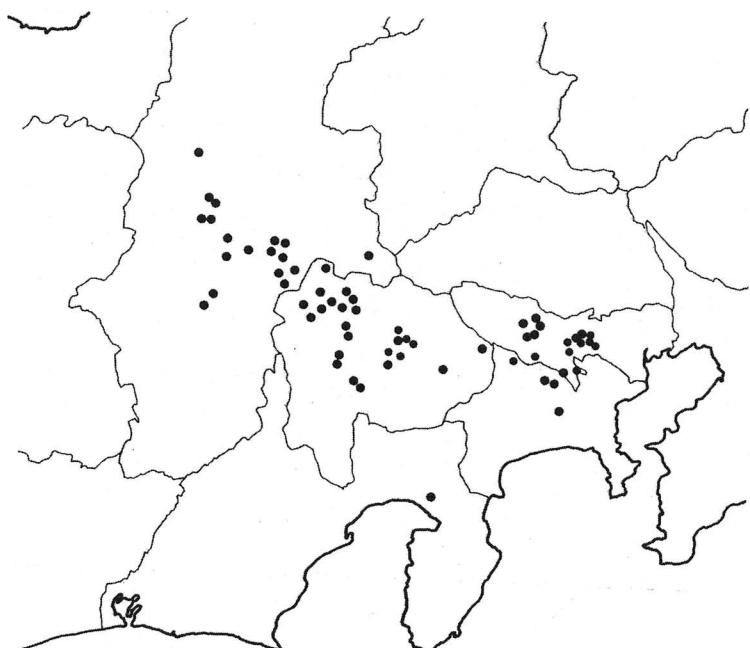
II（藤内I～勝坂II）「粘土板」の貼付は、隆帶でその形状の縁どりだけが成されるようになる。また、三角押引文が消え、代わって本段階に盛行する爪形文がその隆帶の脇に加飾される。

III（藤内II～勝坂II）大きく簡略化され、抽象的となる。

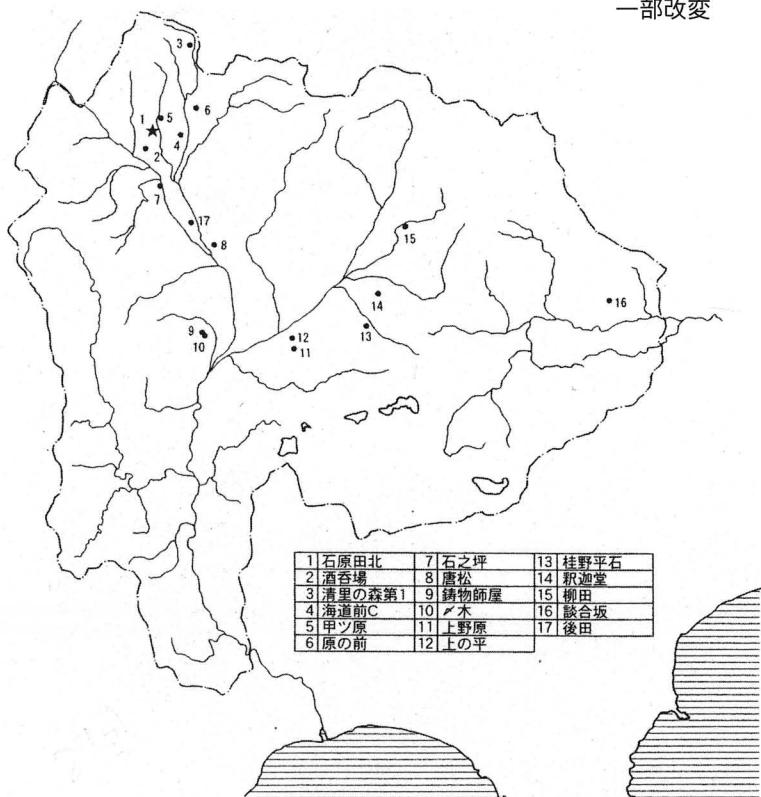
次に、猪俣喜彦氏による釧路堂遺跡の特別展図録（猪俣 2001）では、サンショウウオ文の変遷を次のように大きく6段階に分けている。（①～⑥区分は筆者による）

第1表 縄文時代中期の動物・人面等文様の変遷

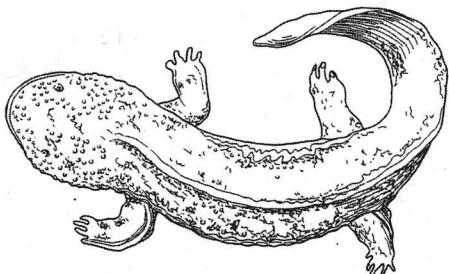
時期	前期				中期								中期後半		
	諸磯b	諸磯c	十三菩提	五領ヶ台	五領ヶ台	勝坂1		勝坂2		勝坂3			曾利1	曾利2	
			晴・踊場	九兵尾1	九兵尾2	猪沢	新道1	新道2	藤内1	藤内2	井戸尻1	井戸尻2	井戸尻3		
ヘビ					○				○	○	○	○	○	○	○
サンショウウオ							○	○	○						
イノシシ	○			△	△				○	○	○	○	○		
カエル									△	○	○	○	△		
半人半カエル										○	○	○			
人面			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△
土偶装飾					○	○	○	○	○	○	○	○			
双環取手							△	○	○	○	○	○	○	○	



1-1 抽象文土器分布図 釧路堂遺跡第13回特別展図録より  
一部改変



1-2 山梨県内抽象文（山椒魚文）土器の分布 櫛原2001より



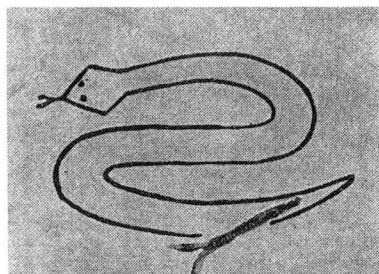
1-3 オオサンショウウオスケッチ



1-4 殷周時代の青銅器にみられる龍文  
小林公明 1991より



1-5・6  
ヘビのペニス（干物）と  
その位置  
吉野裕子 1987より



第1図

- ①その遡源は猪沢期の新しい段階に見られる渦巻き文やJ字文にある。
- ②新道式1段階には、重三角文や楕円文、菱形文、弧状文などの多段化する文様帶に組み込まれ、粘土板貼付隆帶による細身の体部のサンショウウオ状文である。
- ③新道2段階になると体部が太くなり、Y字形の頭部をもつサンショウウオ状文の基本形が出来上がる。概して新道式期のサンショウウオ状文はレリーフ状に立体的な表現のものが多い。
- ④藤内式1段階では扁平な粘土板貼付により体部が表現される。片方の腹部に挑みかかるものや、鱗を思わせる体部への加飾も特徴。
- ⑤藤内2段階になると、体部の輪郭を連続押圧文とキャタピラ文で縁取られる粘土紐隆帶で表現するようになり平面的になる。
- ⑥藤内3段階になると体部はもはや連続押圧文とキャタピラ文で縁取られた1本の隆帶のみの表現となり、オオトカゲを連想させるものや、女性器や男性器の表現が加味されることもあり、モチーフが形骸化してくる。
- また、櫛原功一氏は次のように変遷を述べている。(①～④区分は筆者による)
- ①「山椒魚文の変遷に関しては、新道1期では体部が細く、立体的であり、新道2期には頭部に眼の表現、口を開けたような表現があり、また腕部の先に2本指を持つ例がある。新道期では体部が粘土板貼付で表現され、体部には文様が施文される。概して体部の上半と下半が意識され、上半身はやや太く、下半身は尾部にかけて細くなり、体部には半截竹管文で刺突することでウロコ状の施文を行い、マムシのような印象を与える。また、(中略) 上半身を持ち上げたような、あるいは威嚇し、飛び掛ってくるような体勢である。
- ②それが藤内1期になると体部は粘土紐で縁取られ、キャタピラ文が添い、体部は三日月状、左右対称的で、ウロコ状の文様は次第に無くなっていく。
- ③その後、藤内2・3期には体部が1本隆線で、頭部・尾部が区別できないような事例も増え、形骸化する。
- ④藤内4期以降では、山椒魚文から変化したと思われるモチーフをもつ土器はあるものの、山椒魚文としての原則的な文様要素を見出すことができなくなってしまう。
- このように現在のところ、猪股氏の述べるように、猪沢期にその萌芽を認めるとしても、抽象文は新道式期に出現したと考えて良い。その初期の抽象文は3氏が述べているように、立体的な造形で比較的細い形状を呈し、その胴部断面はカマボコ状となっており、彫刻で言えば

レリーフ状である。頭部は目や口が表現されることが多く、隆線で環状に表現されるものもある。体部はうろこ状の刺突文に覆われる。胴部から出ている足、または腕とみなされている曲線状の隆線は付けられるものと無いもの、あるいは1対2体のうち1体にしか付けられないなど、雌雄を表すかの様なものもある。

なお、その終末については三上氏の考え方が示されている以外は、説得力のある意見は見当たらない。

この抽象文の元となった本来の姿が、新道式の古段階に表現されていると思われるので、各時代の説明を省略し、初源期の具体的な例を観察し、抽象文の出現由来像を想定することとしたい。

## 2 初期抽象文の実態

抽象文の初源が新道式期にあることから、この時期前半の抽象文について示す。

- ① 長野県茅野市梨の木遺跡86号住居出土の炉体土器（第2図2-2）は新道式期の円筒土器で胴下半を欠く。抽象文は口縁部直下に胴部を接し頭部分はわずかに下を向き、尾は弧を描いて垂下する。口縁直下は三角横帯区画が2段、その下に無文帯があり、その下は三角区画帯が付けられている。

この抽象文は口縁部に接して2体1対が表され、その胴部はかまぼこ状の粘土板を逆U字型に貼り付け、頭部には粘土紐でアーモンドアイ状の両目、あるいは大きな口を表し、体部は山形に連続する鱗文を充填させて、尾は垂下する。この動物には胴部からヒレまたは足のような触手状隆線が描かれていないことに注目できる。つまり、この抽象文はヘビ、それも体の太いマムシに近似しており、これを祖形とすると見られる。

- ② 長野県岡谷市後田原遺跡（第2図2-3）は新道式の円筒形深鉢形土器で、平縁口縁部の下は楕円区画帯があり、その下は三角区画帯、更にその下は縦方向の沈線で埋められた横帯区画5段が沈線で描かれる。

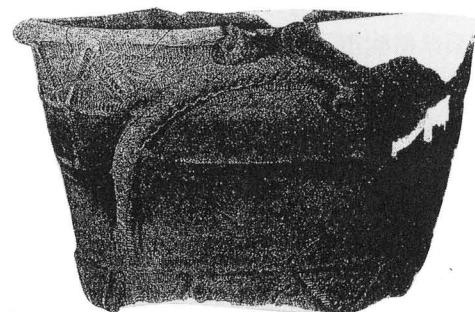
粘土紐を押し付けた断面かまぼこ状の抽象文は三角区画帯から下に1対が描かれ、双環状の目を持つ頭部から左回りに胴部が伸びて、最高部分で楕円区画帯に接し、体部下半分は弧を描いてさがり、尾の先端は右巻きとなり輪を形成する。頭部が内側にまかれる珍しい形態である。

かまぼこ状の体部には縄目状に連続刺突文が施され、ウロコを表現している。胴部からは触手状の隆線は出でていない。胴部隆帶の輪郭はペン先状刺突文で囲まれる。この様子からヘビ文様と思われる。

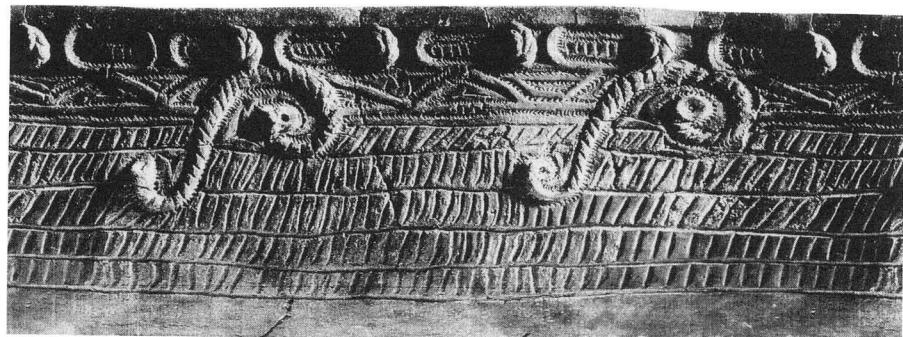
- ③ 長野県原村大石遺跡出土の鉢形土器（第2図2-4）は、猪沢式期のものともされている（小林・小川 1988）が、胴部下半に三角連続横帯区画文があり、新道式に属するものであろう。抽象文は土器胴部中央に2体1対が

	a 抽象文	b 重三角文	c 人体文	d 十字文
第 I 段階				
第 II 段階				
第 III 段階				
1 第 IV 段階				
2				
1 第 V 段階				
2				
曾利 I 式				

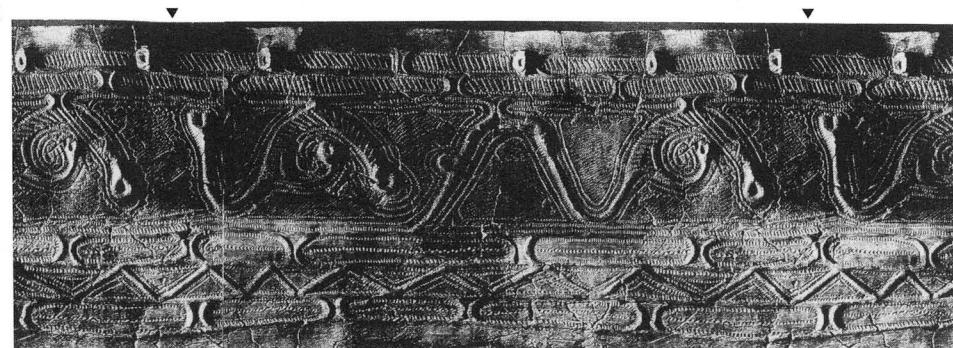
2-1 抽象文などの変遷  
三上徹也 1986より



2-2 梨ノ木遺跡抽象文土器



2-3 後田原遺跡抽象文土器



2-4 大石遺跡抽象文土器

第2図

描かれており、頭部は2匹とも環状を呈するが、1体は長くN字状に伸び、もう1体は跳ね上げた先端がV字に割れている。胴部は粘土版を貼り付けてやや幅広の板状で、鱗状、または縄状に刺突文で装飾している。腹部からは2体とも内側にまくように触手状隆線が付けられ、先端は隆線により環状を呈する。抽象文の周囲は半截竹管により連続押引文が2列巡り、一部には鋸歯状の押引文も巡る。2体の大きな差は尾の長さで、雌雄を現したことと考えられる。

④ 山梨県北杜市石原田北遺跡の（第3図3-1）は鉢形土器の縁に半円形の把手が付くもので、新道式に属する。この把手下部と反対側に2体1対の抽象文が取り付けられる。抽象文の背中は口縁部に接する。頭部と尾部は環状に隆線で表され、断面カマボコ状の胴部は太さの変わらない粘土紐貼付がされ、体部は鱗状の刺突文で装飾される。また、触手状の隆線が胴部下半から頭部方向に曲線を描いて貼り付けられる。

⑤ 山梨県笛吹市・甲州市 釈迦堂遺跡の（第3図3-2）は、小形の鉢の胴部に2体1対の抽象文が付けられ、頭部は双環状の目がつけられ、板状の胴部にはウロコ状の連続刺突文と三叉文が付けられる。2体のうち1体は胴部からの触手状隆線を有し、1体には無いことや、1体の尾が跳ね上がっていることなどから雌雄を示している可能性がある。

⑥ 山梨県笛吹市・甲州市 釈迦堂遺跡の（第3図3-3）は頭部と尾部が環状の隆線で表され、胴部は板状で中央が幅広で、胴全体に連続刺突文が縄目状に付けられる。

⑦ 山梨県北杜市酒呑場遺跡の（第3図3-4）は口縁部に1箇所の半円状把手を持つ土器で、その下に1体の抽象文が付けられる。カマボコ状の胴部の頭部はやや不明確であるが、尾部は次第に細く最後は少し跳ね上がる。胴部には縄目状に連続刺突文で充填され、胴部からは内側に触手状に隆線が貼り付けられ、その先端は膨らむ。

以上の初期と思われるサンショウウオ文・抽象文をまとめると、次のような特徴が認められる。

2体1対が胴部に貼り付けられる。逆U字状の胴部の断面はカマボコ状で、頭部と尾部は躍動感に欠け、垂下するものも多い。また、それぞれの先端は環状の粘土紐貼付が見られるが、頭部には目や口が表現されるものもある。胴部は頭部から尾にかけて次第に細くなり、ウロコ状・縄目状の刺突文・連続押引刺突文に覆われる。胴部から触手状の隆線が曲線的に描かれるものと、無いものがある。

### 3 抽象文=サンショウウオ状文の正体

先に述べたように、抽象文の初期形態には次のような

特徴がある。

- ①土器の胴部に逆U字形に貼り付けられる。
- ②胴の太さは頸部から胴部がほぼ同じで、尻尾先端に行くにしたがって細くなる。
- ③胴部断面は当初カマボコ状から次には板状状の貼付となる。
- ④頭と尻尾の区別があり、頭は目や口が表現される。
- ⑤胴体はウロコ状の刺突文で飾られるか、縄目状連続刺突文で充填される。
- ⑥ 胴からの触手は、最初は単線の隆線で、次第に先端が二股になる。

次に、抽象文の祖形として想定された様々な例を取り上げ、その適否を検討しておきたい。

#### i サンショウウオ (第1図1-3)

藤内期の文様をオオサンショウウオと見て想定されたのであるが、サンショウウオにはウロコは無いこと、また、手足



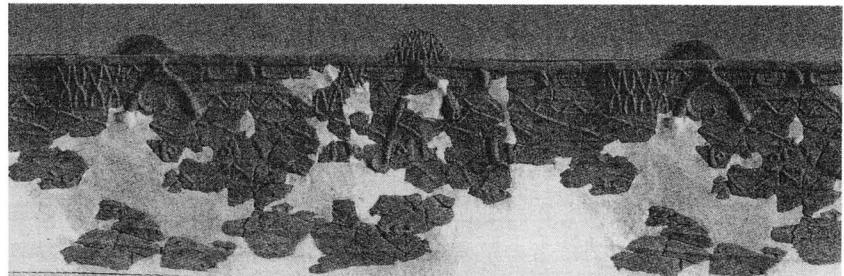
の表現が抽象文には無く、触手状隆線は1本であることなどから、否定されよう。

ii ミズチ（水虬）これは『日本書紀』仁徳天皇67年条に出てくる川の主、水の神で、「吉備中国の川鴨河の派（かわまた）を占拠する水虬が鹿に変化した」と記載されている。川の神・水の神であるが、その姿は抽象的で不明である。こうした神が縄文時代にまで遡り表現されていたかは判断できない。

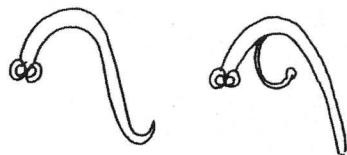
iii 一本足の竜（小林公明 1981）中国殷周青銅器に認められる夔龍文（きりゅうもん）と称される一足の龍文様（第1図1-4）と類似する（小林公明 1991）。文様的には極めて類似し、しかも辟邪文とも類似している。辟邪文は両翼を持つ4足の龍形動物（註3）で、「魔除け」としての意味を持つ。なお、近年、小林公明氏は南西中国の少数民族の創生神話から鱗（こん）・禹（う）親子が水の神であり、その原像が水生動物であることから、抽象文が鱗（こん）の姿を写しているとも考えている（小林公明 2006）

iv ヘビ=マムシ 旧来より多くの研究者が抽象文=ヘビ=マムシ説を唱えているが、近年、小野正文氏は長野県丸山南遺跡のカエルを呑み込む姿からサンショウウオとするよりヘビの一種と考えている（小野正文 2002）。また、櫛原氏は新道式期の抽象文が胴部のウロコ状文様や、上半身を持ち上げ、飛び掛るような姿勢の文様からマムシを想定している（櫛原功一 2001）。

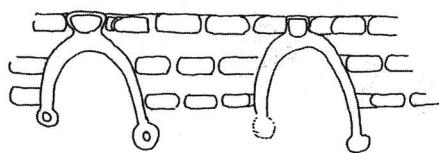
筆者もヘビ=マムシ説に大いに賛同するところである。ただ、このヘビ=マムシ説が説明できない胴部の触手状



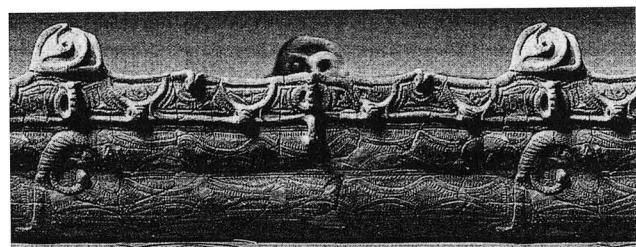
3-1 石原田北遺跡抽象文



3-2 積迦堂遺跡抽象文土器



3-3 積迦堂遺跡抽象文土器



3-4 酒呑場遺跡抽象文土器

隆線文様については、他の説でも的確な説明がされていないことから、先に述べたように、中国の新石器時代文様などを起源とする「一本足の竜」説が生まれている。しかし、中国からの文化が伝播しているとしても、年代的な継続性や文化の伝播ルートの足跡など、明らかにすべきことは多く、直ちに賛同しかねることも多い。

この胴部の触手について、筆者の解釈はマムシの雄のペニスや雌の出産の姿と考えている。次の写真は出産時にアクシデントで車に踏まれたマムシであるが、胴下半部分より子蛇が生まれている様子が分かる。また、第1図1-5・6はヘビの雄のペニスの図である。特にペニスは先端が二股に分かれしており、こうした図像が抽象文にも見られることが注目される。また、このヘビがマムシであることは、マムシが卵胎生であり、数年毎に10匹前後の子ヘビを出産することが特徴である。他のヘビは卵生であるから、きわめてマムシは特異な姿を見せていくことになる。



このようなことから、抽象文の最大の疑問である腹部の触手状隆線の説明はできるのではなかろうか。だとすれば、抽象文土器のサンショウウオ文は、マムシの生殖行為や出産行為を表現したものであろう。

縄文人にとって、マムシは毒を持つことから、最大の危険な動物であると同時に、ヘビという神聖な動物の頂点に立つもので、その出産は卵胎生という他のヘビに見られない生態を持つことも、その特異性を際立たせている。これが、土器の胴部を飾ることは、土器の中身を他の邪惡なものから守る姿と見てよいだろう。

## まとめ

以上、抽象文・サンショウウオ文について、その初源期の姿からヘビ＝マムシを神聖視した故に出現した文様であることを想定した。このヘビ文様が第1表で見たように藤内式から井戸尻式の、口縁部や胴部のヘビ文様に発展していくと考えられる。

この文様が古代中国や環太平洋の神話や民話に表される動物、あるいは中国古代青銅器文様との共通点があることは、井戸尻考古館を中心とする研究者の先行研究で

もよく知られているところであるが、ここでは敢えてより身近な自然の中から、その原像を探ってヘビという説にたどり着いた。

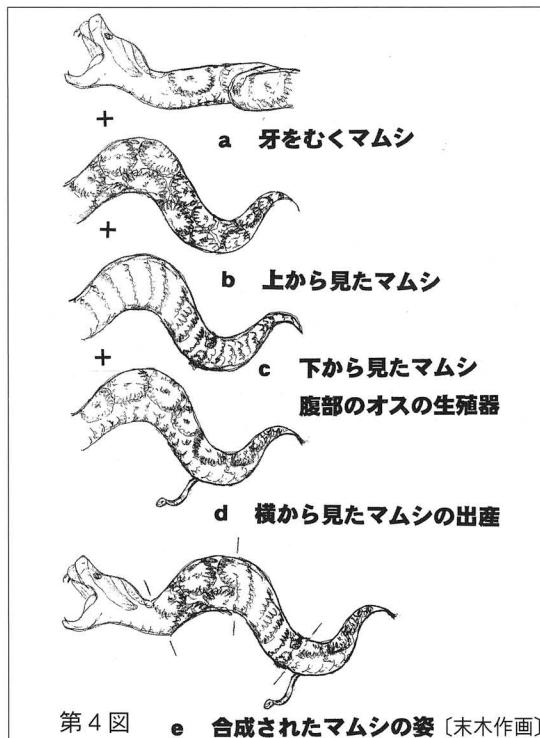
土器の胴部に展開するヘビが、生殖や出産の姿を示すことで、内部への有害な動植物の混入や短時間での植物腐敗を忌避する願いが強く描かれたものであろう。

なお、この背景として、縄文中期前半は気候の温暖化とも合わせ、動植物が増加して縄文人の食糧が急激に豊かになった時代であり、また、その一方で文化的にも爛熟期を迎えた時代である。このことが多様な祭祀を生み出し、具象・抽象の文様で土器を飾ったと思われてきた。

一方でこの時期は縄文人にとって有害な動植物も繁殖し、病原菌も増加したに相違ないから、繁栄と危険とは、常に背中合わせであったともいえる。だからこそ、人間に害をなす有害な悪しきものに対抗するヘビ文様をデフォルメした辟邪文様が出現し、食糧を作り出す土器の胴部に飾られ、やがて藤内式から井戸尻式期になると、ヘビ文様は辟邪としての効果をより發揮させるために、旧来の胴部だけではなく口縁部を飾る文様へと、その位置も拡大し変化したと思われる（註4）。

この変遷については、三上氏と異なる見解であるが、三上氏の変遷観を否定するものではなく、抽象文が形骸化することにより、新たに有孔鍔付土器などの胴部や深鉢形土器口縁部に、よりリアルなヘビ文様が出現し、奔放な造形が見られるようになることも事実であろう。更にはイノシシとヘビが合体した「イノヘビ」なども、新たな縄文人のアニミズムの出現ととられることができるのではなかろうか。

なお、最後であるが、絵画的な側面からも気がついた



第4図 e 合成されたマムシの姿 [末木作画]

ことを記しておきたい。

抽象文を観察するときに、常に、動物のありのままの姿が描かれているか、その姿を抽象的に描いているか、判断して本来の姿を想像しなければならない。

この時、佐原真氏は銅鐸絵画を読み解く手法の中で、幼児の絵が平面と側面を同時に描き表すことが多く、その描き方が弥生時代や古墳時代の絵画に共通することを指摘している（国立歴史民俗博物館 1995）。

例えば船の絵であるが、船とその上に乗る人物は側面から描き、舟を漕ぐたくさんのオールは上から平面的に描かれることである。

このような例からすると、抽象文のサンショウウオ文などが、大きな口を開いている頭部は、側面からの描写で、胴部の「逆Uの字やNの字」はヘビの蛇行を上から平面的に描き、出産時の幼蛇やオスのペニスなどは側面的な描き方をしていると見れば、確実に抽象文はヘビであるといえよう（第4図）。

本論を作成するにあたり、井戸尻考古館長の小林公明氏からは資料の提供をいただいた。また、原村教育委員会平出一治氏・尖石考古館の功刀司氏からは資料の紹介をいただき、釧路堂遺跡博物館の秋山圭子氏に資料提供や調査の便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げたい。

## 註

1 サンショウウオは両生綱・有尾目（またはサンショウウオ目）サンショウウオ上科に属する動物で、古くは椒魚（はじかみうお）とも呼ばれ、肉が山椒の香りがするところからこの名称が付けられたという。また、食用として捕らえたサンショウウオを縦に半分に裂いて、半分を川に放流すると自然に半分が再生するという伝説もあったところから「はんざき」ともよばれた。

江戸時代の寛永20年（1643）頃の『料理物語』には、食材とされていたことが記されている。サンショウウオ属には17種類ほど、オオサンショウウオ属には1種類が日本に生息している。オオサンショウウオは全長50～150cm、他の種類は20cm以下と小形である。

2 これは『日本書紀』仁徳天皇67年条に出てくる川の主、水の神で、「吉備中国の川鴨河の派（かわまた）を占拠する水虬が鹿に変化した」と記載されている。

3 辟邪文の「辟邪」とは、中国の漢代に流行した想像上の神話的な動物で、鹿に似て2角を持ち邪悪を避けるという。人々は「辟邪」の法力により災いを取り除くことを願った。この造形の祖形は紀元前より西アジアから中国に伝播されたと思われ、陵墓の前に巨石を用いて彫刻された。

4 これについて、近日中に別稿で詳述する予定である。

## 参考文献

- 猪股喜彦 2001 『第13回特別展 抽象文土器の世界』 展示図録 釧路堂遺跡博物館
- 今福利恵 1999 「縄文時代土器編年」『山梨県史 資料編2』
- 小野正文 1992 「イノヘビ—猪蛇装飾のある土器について—」『考古学ジャーナル』346
- 小野正文 2002 「物語性文様について」『土器から探る縄文社会』 山梨県考古学協会
- 櫛原功一 2001 「第5章第1節 縄文中期の集落変遷と土器様相」『石原田北遺跡Jマート地点』石原田北遺跡発掘調査団他
- 国立歴史民俗博物館 1995 『銅鐸の美』「I 銅鐸の絵と子供の絵」
- 小林公明 1991 第2章9節世界觀と神話像『富士見町史』
- 小林公明 1981 「一足の龍」『山麓考古』14号
- 小林公明 2006 「みづちの風景」『井戸尻』8号
- 佐原真・春成秀爾 1997 『歴史発掘⑤ 原始絵画』講談社
- 設楽博巳 1996 「IX つきあいのはじまり」『動物とのつきあい』企画展展示図録 国立歴史民俗博物館
- 末木 健 2007 「ヘビとカエルとヤマンバと」『山麓考古』20号
- 末木 健 2009.5 「縄文時代の動物・人体文様を解く—豊穣と辟邪の祈り—」『山梨考古学論集VI』山梨県考古学協会
- 藤森栄一 1965 『井戸尻』中央公論美術出版
- 三上徹也 1986 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器群の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51
- 吉野裕子 1987 『ものと人間の文化史 32 蛇 日本の蛇信仰』法政大学出版局

## 挿図資料出展一覧

- 第1図-1 抽象文土器分布図 釧路堂遺跡13回特別展図録一部改変  
1-2 山梨県内抽象文（山椒魚文）土器の分布 櫛原2001  
1-3 オオサンショウウオスケッチ 佐原真・春成秀爾 1997  
1-4 殷周時代の青銅器にみられる龍文 小林公明 1991  
1-5・6 ヘビのペニス（干物）とその位置 吉野裕子 1987
- 第2図-1 抽象文などの変遷 三上徹也 1986  
2-2 梨ノ木遺跡抽象文土器 『梨ノ木遺跡』 2003 茅野市教育委員会  
2-3 後田原遺跡抽象文土器 『後田原遺跡』岡谷市教育委員会  
2-4 大石遺跡抽象文土器 『長野県中央道発掘調査報告書一大石遺跡』長野県教育委員会ほか
- 第3図-1 石原田北遺跡抽象文 『石原田北遺跡Jマート地点』 石原田北遺跡発掘調査団ほか  
3-2・3 釧路堂遺跡抽象文土器 『釧路堂遺跡I・II・III』山梨県教育委員会ほか  
3-4 酒呑場遺跡抽象文土器 『酒呑場遺跡』山梨県教育委員会

\* 3-2～4は『第13回特別展 抽象文土器の世界』展示図録 釧路堂遺跡博物館より転載